

北京人民广播电台
中国唱片总公司出版

京鹿子



2月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十九



漕ぎ出さむ星を導に除夜の海
鐘に足す柏手ふたつ除夜詣
大琵琶の空に修羅おく浮寝鳥
遥かなる星を枕に浮寝鳥
百年もとせの万両の庭華やげり
略式に活けて千両主座に就く

生きてなほ凡は凡とし水仙花
御降りの庭しんしんと白き音
なずな爪ひとつの棘を思案する

歳晚吟行

冬木立つ万の神の黙深し
宮がらす木々の上枝の寒を抱く
神丘の冬芽いやしけ吉よ事ごとなる
数へ日の巫女の溜まりへ世辞ひとつ
地球儀を懐に抱く冬將軍

英華採集

藤袴ゆつたり流る里時間

高槻 杉 井 真由美

季語の「藤袴」そして「里」というキーワードから句に隠れているもの、それは藤袴を最も好む蝶「アサギマダラ」の存在である。秋の七草の一つである藤袴の蜜にある毒性のものが蝶の雄を引き付けるようで、その蜜を吸うことでアサギマダラの妖しげな色彩を誇示し天敵への防御も備えているらしい。毎年、同じような時期に花を咲かせ同じ場所にやって来る蝶の相思相愛の関係性が保たれると中七下五の言葉には必然が生まれるのではないか。

寄り添うて母のぬくもり除夜の燭

大津 村 野 名於子

今年も残り少ない時間となり一年を振り返りながら色々な事が胸に去来するものを感じている作者には、亡くなった母の事が一番の思いとして迫ってくるのである。仏壇の前に立ち蝋燭に火を付けた時の蝋燭の揺れに、母の息を感じたのも介護に寄り添った時に思った母の温もりに重ね合わせたもの。年の夜にこれまでに享けた母への感謝に手を合わせ、明年へ天国より見守ってもらいたい新たなお願いも母への強い愛が垣間見える。

馬鈴薯のゑくぼくすくす笑ひをり

福山 政 時 英 華

奥坂まやに「万有引力あり馬鈴薯にくぼみあり」という句がある。この句は、取合せあるいは二物衝撃の手法としてよく取り上げられる。掲句は、馬鈴薯の凸凹とした物を「曆」と見立てた素直な写生であるが、作者の発見とした方がむしろ良いだらう。スーパーで買ひ物の折り何気なく手にした馬鈴薯と向き合うとこちらを見て笑っているように感じた感覚が素直である。何か楽しい一日であったような嬉しい余韻を残した一句と言える。

神麓集

白 梅 沼 田 巴 字

寒 参 り

北 川 孝 子

白梅のひとかたまりの夕まぐれ

寒参りといふ沈黙やうすざくら

利休忌や潮音聞かんと港まで

梅東風や養生訓の人つれて

白魚や世のはかなさを思ふ時

梅ふむ余生ふつくらして来たり

遠き世の波羅蜜行や露の臺

うつうつと春暁のゆめさめやらす

山独活は夜を匂ひてけものめき

黒猫のいよいよ黒し梅疾風

極 月 植 村 蘇 星

秋 意

直 江 裕 子

極月や累が累呼ぶ風の声

コンビニの明るさ秋意もてあます

お陰さま二四六九十月極む

衰への美学ひそかに水の澄む

忙しくも一日一笑年の暮

もう一度来ることになる柿の家

自ずから合はせる心年の暮

どこにでも行ける気がするコスモス原

支へ合ふ心の小窓冬ぬくし

指先の銀紙うすく振れば秋

花色 高木晶子

倒れても美しくあれ秋桜
秋刀魚焼く同じ仕草の年月よ
柿膾令和一年一ト昔
留守の縁饅頭一つ柿一つ
花色を最後に残し冬没日

遅刻 奥田筆子

越冬燕渡りに遅刻するなんて
ピアノから水あふれ出る文化の日
背骨のやうな溪流神無月
泡立草背を低くして生き新伸びる
わが死後の鬼灯明り消し忘れ

逃竄の家 伊藤希眸

ひようひようと風音の飛ぶ冬青空
触れながら同じ椿を見詰めをり
釣舟に冬着の己れ乗せて漕ぐ
逃竄の家かな冬灯点しつつ
親子豹変葉牡丹の葉は開かず

春氷 井上菜摘子

立ち漕ぎの少年二月に目もくれず
きさらぎの底を灰木のり子起つ
自己主張らしきがぼつり春氷
合同句集あたたかおほかたは遺影
ビードロを吹いて二月は誕生月

神麓集

神麓集

鳴き砂 村田あを衣

ぬれ衣の晴れぬままなり穴まどひ
神境の隅の居ごこち穴まどひ
離愁かな踏めば鳴き砂月に鳴く
追憶の言の葉今に小鳥来る
もの足らぬ省略木の実降りやまず

春一番 井尻妙子

七人の小人を誘ふ雪の朝
一投に集まる雪の日の遊び
ふと明日を見失ふ日のおでん酒
春一番いざ出陣の電子音
ポケットに後悔のチョコ二月尽

つはの花 山中志津子

屋敷神残し改築つはの花
奈良格子並ぶ町筋迷ひ鹿
妣も吾を恋し恋しと彼岸花
菊人形身を縛る伽美しき
戦場の微熱まとひて後の月

未来の夢 鷺山珀眉

冬耕やまなうらに置く未来の夢
偶さかの鐘の余韻や身にぞ沁む
着ぶくれてうしろ姿を忘れをり
すべり台の古き傷口秋夕焼
未枯の風は迷子の旅人と



京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

水琴集

宇治 北田せい子

早天へ椋鳥放つ大樹かな
御朱印の乾くを待ちて秋惜しむ
秋風や院展あとの奈良ホテル
一汁と坊の土鍋の零余子飯

賜の贅天命なりと天仰ぐ

久世 貝路 紅沙

神風の落葉の嵩や古戦場
落葉焚き落葉のいのち天界に
終活の話もり上ぐ落葉焚き
故郷は枯ひといろとなりけり
初霜や指一本のためし書き

赤穂 久保みどり

秋の蝶画板の端を越えゆけり
深海魚となりてふたりの霧の海
落人の里に師の句碑照紅葉
歳月を過疎に刻みて柿すだれ
勤勉な猪や夜毎の田のアート

京都 野田 園子

聞き洩らす風の二言山粧ふ
一枚の空百枚の柿すだれ
桐箱の枯露柿の名はエリザベス
秋深し金平糖に淡き影
遊歩道名のなき草も秋色に

高槻 杉井真由美

大西 逸子

ふるさとへバス七曲り風芒
数珠玉をつなぎあの日をひき寄する
どんぐりの膨らむポツケ駈けてくる
一粒の葡萄の滴病む母へ

大津 村野名於子

福山 豊高 悦女

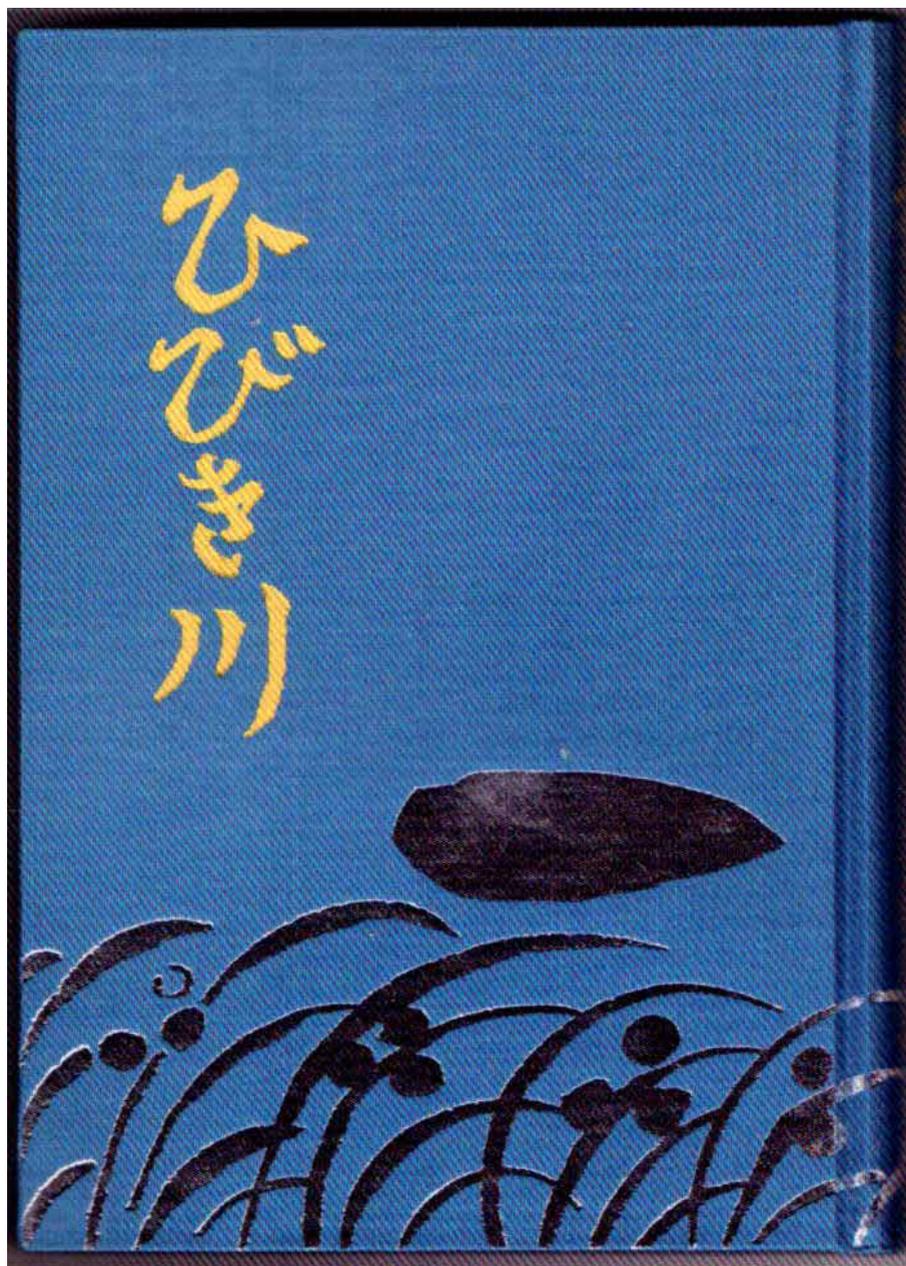
初紅葉はんなりこぼる京言葉
鬼の子の鳴けど届かぬ父恋し
峰に立てば並べて乱山紅葉づれり
振り上げし鎌で見得切る枯蠅螂
草臥を労(ね)ぐる一献秋収
蔦枯るるレンガの壁の網模様
くつきりと比良稜線に冬きたる

政時 英華

大津 園田 義次

冬の比良一朵の雲の動かざる
葛湯のむ息の窪みの柔らかし

秋愁や鞆に詰める罪と罰
振つて消すマツチの頭秋夕焼
虫の夜の建て付け悪き蝶番



竹貫示虹 第一句集『ひびき川』